

ONIBI

外務省主催 第11回 **日本国際漫画賞** 優秀賞受賞作
日本語版は祥伝社より発売中!!

"ONIBI-CARNETS DU JAPON INVISIBLE" by Atelier Sento

やつてきたセシルとオリヴィエ
猿和田で見つけた
妖怪カメラを手に
内野村上、弥彦山
などを訪ねた2人が、
そこで見たものとは……

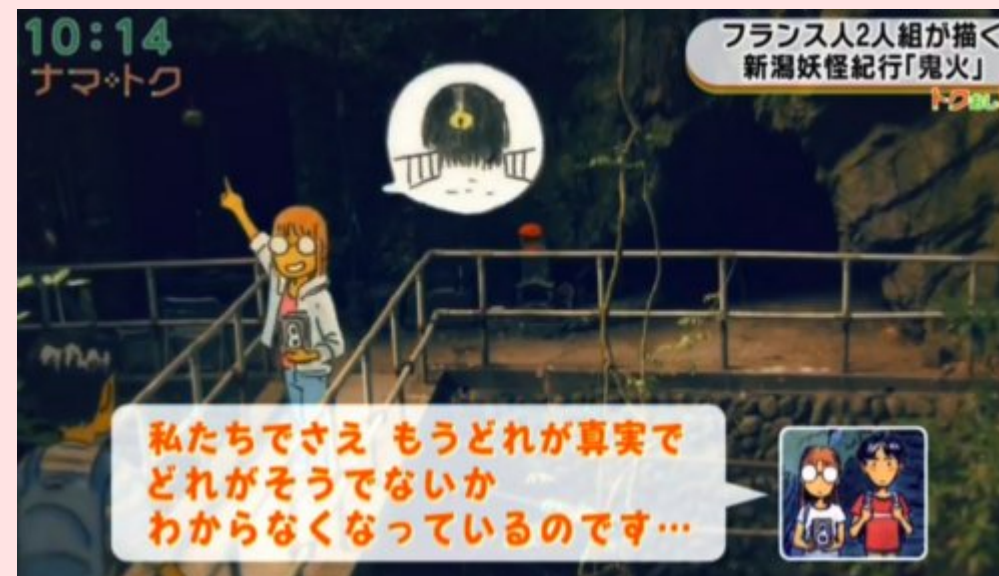
著 **アトリエ・セントー**
セル・プランナ・オリヴィエ・ビシャー

監訳 駒形千夏 (新潟大学助教) 監訳 東 雅 (信託研究)

鬼火

フランス人ふたり組の日本妖怪紀行

Asahi Shinbun - 07/02/2018



NAMATOKU UX NIIGATA TV 21

Émission de 10 minutes sur la chaîne de
télévision locale UX
17/11/2017

Visite des lieux réels et rencontre des personnages

Articles variés parus dans la presse
locale Niigata Nippo

Manga



鬼火
フランス人ふたり組の
日本妖怪紀行

アトリエ・セントー
(訳・駒形千夏)

日常生活にある怪異

妖怪は、悪魔や鬼神とは違って、私たちのすぐそばにいるような気がする。そうした身近さゆえに、妖怪は老若男女に愛されてきたのだが、特に大人にとってはどこか懐かしい存在である。理由はおそらく、日常と非日常のあわいからひょっこり顔を出す妖怪が、見たまま感じたままに生きていた子どもの頃を思い出させてくれるからだろう。

本書の主人公はフランスから新潟にやってきたセシルとオリヴィエ。2人は妖怪を撮影できるというカメラを手に入れる。半信半疑の2人はカメラに導かれるように不思議な出来事に遭遇してゆく。とはいえ、決定的な何かが起きるわけではない。旅の中で2人が見つけるのは、日常生活のうちに垣間見える些細な怪異である。

カメラを携えた旅人には、物珍しさを求める観光客という軽薄なイメージもある。しかし、本書が描く妖怪カメラとの旅は、新潟で育ち暮らす者が見失い、忘れてしまった、懐かしい場所が発見されていくことになる。新潟に暮らした経験をもつ作者だからこそ成し得た、卓越した構成と細やかな描写が凝ることができる一冊である。

(新潟大学人文学部 准教授 石田美紀)

新潟へ友情のメッセージ

日本国際漫画賞 都内で授賞式
本県舞台「ONIBI (鬼火)」優秀賞

海外への漫画文化の普及を目指し、漫画を通じた国際交流に貢献する作家を顕彰する「第11回日本国際漫画賞」(外務省主催)の授賞式が23日、東京都港区の同省飯倉公館で開かれた。本県での滞在経験などを描き優秀賞に輝いた「ONIBI (鬼火)」の著者、セシル・フランさん(29)＝フランス＝は「ONIBIは新潟でお世話になった人々たちへの友情のメッセージ」と思いを語った。

フランス人作者、喜び語る



日本国際漫画賞で優秀賞を受賞したセシル・フランさん＝23日、東京都港区

妖怪が写るというカメラを手に入れた主人公2人が妖怪を探し求める物語で、新潟大に留学経験のあるフランさんらフランス人作家のコンビ「アチ」をしたフランさんは「私たちが見た日本を日作した。舞台の大半が日本人が面白いと感じてくれた。」と喜びを語った。県で、弥彦神社などの風景や、人々との交流を鮮やかに表現している。

2007年に創設された同賞には今回60の国・地域から326点の応募があった。最優秀賞1点、優秀賞3点などが選ばれた。

「ONIBI」の日本語版(税込み3千円)は祥伝社から刊行されている。

アトリエ・セントー著
駒形千夏訳

鬼火

にいがたの一冊



写るというカメラと特別なフィルムを手に入れるところから物語は始まる。妖怪の姿を求めて、弥彦神社や弥彦山、内野の稲荷神社、日本海に面する町などを歩く。そこに描かれた風景は、現地を実によく切り取っている。絵はきついろな色使いが印象的だ。稲穂の香りや、こけむした森に漂う土の匂い、吹き抜ける潮風など、五感で受け取る。

妖怪探すフランス人コンビ

るものまでが描き込まれているかのようだ。訪ねた先々で2人は現実なのか幻想なのか、その間をさまようような不思議な感覚に陥る。妖怪カメラに果たして妖怪は写っているのか、その答えは本書を手にしてそれぞれが感じ取ってほしい。

旅先の様子だけでなく、2人が新潟滞在中に実際に親交を重ねた人物や店が実名で紹介されているのも、面白さの一つだ。新潟大学近くの喫茶店マルグッタ51とその店主夫妻、ギャラリ1蔵蔵とそのオーナーなどが登場し、人情味ある新潟も描かれている。

現在と過去、今いる場所とどこか知らない場所が交錯するような、そこには人間以外の何かが確かにいるような、不思議な感覚を共有できる。解説には

高内 小百合
(論説編集委員)
■祥伝社・3000円

新潟生活 漫画で繊細に

仏作家2人、副市長表敬

中央区で原画展開催中

新潟市などを舞台とし、
 昨年「日本国際漫画賞」
 で優秀賞を受賞した漫画
 「ONI・B・I（鬼火）」を
 描いたフランス人作家ユ

市役所を表敬訪問したセシル・ブランさん(右)とオリビエ・ピシャルさん(左)＝新潟市中央区

ニット「アトリエ・セントー」のセシル・ブランさん(30)とオリビエ・ピシャルさん(36)が、同市の木村勇一副市長を表敬訪問した。

新潟市マンガの家(中央区)で同作の原画展が開催されるのを機に、同市を訪れた。物語は、フランスから来た2人の主人公が妖怪が映るといふフィルムカメラを手に入れ、地元の人々の話を聞きながら妖怪を探すというもの。2人の新潟での生活が投影され、繊細な水彩画で描かれてい

12日の表敬訪問では、漫画を読んだ木村副市長が「外国人にとって田園風景が魅力的であることが分かった。2人から新潟の良さを教えてもらった」と感謝。セシルさんは「この漫画が、日本文化を伝えてくれた新潟の人への恩返しになればいい」と語った。

原画展は来年1月15日まで。21日午後2時には、セシルさんとオリビエさんのトークイベントもある。無料。問い合わせは、025(201)8923。

新 潟

新潟支局
 〒950-0965
 新潟市中央区新光町
 5-1千歳ビル
 ☎ 025-285-2121
 FAX 025-282-2152
 niigata@sankai.co.jp

購読申し込み
 0120-70-3034

配達・集金
 0120-34-4646

紙面・記事
 0570-046460

Web
<http://www.sankai.com/region/region.html>

12版 (新 潟) 20

平成30年(2018年)10月13日 土曜日

漫画で日本文化紹介

「鬼火」仏作家 舞台の新潟市表敬

新潟市などを舞台にした漫画「ONI・B・I 鬼火」を手がけた、フランスの2人組作家ユニット「アトリエ・セントー」のセシル・ブランさんと、オリビエ・ピシャルさんが12日、新潟市の木村勇一副市長を表敬訪問した。「新潟市マンガの家」(同市中央区)では「鬼火」の企画展示が行われており、作品の原画など約100点を鑑賞できる。

昨年の日本国際漫画賞で優秀賞を受賞した「ONI・B・I 鬼火」は、フランスから新潟を訪れたセシルさんとオリビエさんが購入した、妖怪たちをフィルムに焼きつける中古カメラを軸に話が展開する。作品にはセシルさんが新潟大に留

「ONI・B・I 鬼火」
 © Atelier Sentō
 (新潟市マンガの家提供)

学した際の体験も投影されており、実在する市内の観光地が登場するのも特徴だ。

表敬訪問したのは2人と、「ONI・B・I 鬼火」の翻訳を担当した新潟大の駒形千夏助教。応じた木村副市長は「漫画の世界観が、市民にとっても新たな発見になると感じている」

第25回新聞記事感想文コンクール(県NIE推進協議会主催)の入賞作が決まった。大賞には新潟清心女

新聞記事感想文コンクール 大賞に細谷和音さん

子中2年、細谷和音さんの「不登校と私」、会長賞には新潟市立五十嵐小6年、遠藤樹さんの「笑顔の効

と述べた。オリビエさんは「新潟で、このような温かい歓迎を受けるとは思わなかった」と感謝。セシルさんも「日本文化や新潟のことを教えていただいた方々への恩返しとして、この漫画を描いた。日仏交流の場面でも、漫画を通じて互いの国や文化を知ることができ」と語った。

企画展示「アトリエ・セントー 『鬼火』の世界展」は来年1月15日まで開催。今月21日にはセシルさんとオリビエさんのトークセッションも予定されている。問い合わせは新潟市マンガの家 ☎025・201・8923。

(太田泰、写真も)



NST TV

Émission de 6:46 minutes sur la chaîne de
télévision locale NST
12/10/2018



ARTICLES JAPONAIS EN LIGNE

- [COMICSTREET](#)
- [HON HIKIDASHI](#)
- [TOSHO SHINBUN](#)

Yû #28
15/12/2017
magazine d'histoires
de fantômes



People
怪談山海評判記

フランスより『鬼火』日本語版刊行に寄せて
漫画制作集団 アトリエ・セントー

訳 駒形千夏



新潟市内野にある神社で

日本全国、あの山中にもこの海辺にも怪談はある。そして、現代怪談シーンを牽引する各地の団体や個人に、思いの丈を語っていただく「怪談山海評判記」

日本を旅するときはいつも古いフィルムカメラを持っています。撮れるのは、ちょっとピンぼけな白黒写真。それはまるで過去の記憶を捕まえたかのようで、そこに写る人間はまるで私たちに惹かれて出てきた幽霊のようです。そこから私たちは「目に見えない精霊が撮れるカメラ」という着想を得たのでした。新潟滞在中に撮った写真を見返しながら、ここにどんな妖怪が隠れているだろうねと話

合ったものです。少しずつ、あ



『鬼火』書影

りたらゆる摩訶不思議な逸話が私たちの頭の中に蘇ってきて「鬼火」の筋立てになりました。この本で私たちはありふれた観光地とは違う日本をフランスの読者に見せたかったのです。だからこそ、日常生活を通して土地やそこに住む人々を描きました。西洋の民話に出てくる怪物は過去のもですが、日本の妖怪は今でも日常生活と深く結びついています。例えば遠野では今でも子供たちが釣竿の先に胡瓜(かぼち)を結びつけています。彼らに河童は捕まえられませんか？ 今日がだめでも、たぶん明日。

も、紛れもなく、妖怪はまだ確かに生きています。新潟県阿賀町の津川では山間の狐の嫁入りに行きましたし、また青森では巨大な張り子の鬼が道に浮かぶのを見ました。日本では、少し想像力を巡らせば、どんな小怪でも妖怪狩りができるのです。祥伝社から日本語版の話がきたとき、まるで夢じゃないかと思いました。『鬼火』は私たちの初めての本ですから、日本の読者に読んでもらうことができるなんて全く想像もしませんでした。ネットでは好意的なコメントに勇気づけられていました。日本の描き方を褒めてくださったり、ラファディオ・ハーンや水木しげると対比させて見



夢の中で見た風景

『鬼火』日本語版で、読者の皆様には、新潟で妖怪狩りするフランス人ふたり組を楽しく追いかけてもらえたらと願っています。妖怪写真の撮り方指南もあれば、おいしいカレーのご紹介も出てきます。妖怪写真の方は結果は保証しかねますけど、カレーは、もう、最高のおいしいです。『鬼火』楽しんでください！